

精神障害者の競技スポーツ推進と国際化における現状と課題

—Dream World Cup Rome 2018 出場国から読み解く—

田中暢子*

森谷航** 佐々毅***

抄録

精神障害者の競技スポーツは、1990年以降に世界各地でムーブメントが起きたが、国際的な動きになるのは2010年代以降のことである。

2019年現在、精神障害者の国際大会は、2016年と2018年に2回開催され、また実施されている競技はフットサルである。これは、2013年に日本で開催された第1回精神障がい者スポーツ国際シンポジウム/国際会議にて、この国際シンポジウム/国際会議に参加した全8カ国でフットボールが推進されていたため、フットボールをロールモデルとし、精神障害者の競技スポーツを推進しようとするのが背景にあった。そのため本稿は、競技スポーツとしながらも、フットボール（フットサル）を中心に論じていく。

本研究は、2009年、他国の状況を把握し、日本における精神障害者スポーツの発展に貢献することを目的として始まった。その後、2011年のイタリアと日本の国際親善試合、2013年の国際シンポジウム/国際会議、2016年の第1回ソーシャルフットボール世界大会の開催時期に、各国の動向について調査してきたものを基盤とし、2018年にイタリアで開催された第2回ソーシャルフットボール世界大会（この大会より、通称をDream World Cupに）に参加した9カ国を調査対象とし、精神障害者の競技スポーツの国際動向と課題を読み取り、国内外の精神障害者スポーツの発展に貢献することを研究目的として実施した。

調査方法は、アンケート調査法、半構造化インタビュー法を用いた。実施時期は、大会期間中と大会終了後約半年後の計2回であった。調査結果から得られた重要な点は主に3点である。

第1に、主たる対象疾患は、2013年、2016年、2018年ともに統合失調症と気分（感情）障害であり、変化が見られなかったことである。

第2に、各国の競技環境の課題を探ると、資金難、組織体制などが示唆された。一方で、成績上位にあるチームには、代表合宿の開催数等に差異が見られた。

第3に、大会後に選手が前向きな姿勢を見せるなどの報告がなされた。こうした競技スポーツが、精神障害者の病状のリハビリに効果があるとの断言には至らないが、こうした兆候を示唆できたことは、本調査でも大きな成果であるといえる。

歴史の浅い精神障害者のスポーツ推進と国際化における現状と課題について、今後も縦断的に調査していくことにより、国内外の発展にも寄与できうことは間違いない。

キーワード：精神障害者の競技スポーツ，国際比較研究，セルフヘルプグループ，競技環境，Dream World Cup

* 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部 〒225-8503 横浜市青葉区鉄町1614

** 桐蔭横浜大学大学院スポーツ科学研究科 〒225-8503 横浜市青葉区鉄町1614

*** 新検見川メンタルヘルスクリニック 〒262-0025 千葉市花見区花園1-9-18-2A

Global Current Trends and Issues of Competitive Sport for People with Mental Health Problems

— A Case Study on Participating nations in Dream World Cup Rome 2018 —

Nobuko TANAKA*

Wataru MORIYA**

Takeshi SASSA***

Abstract

In 2013, the 1st International Symposium / Meeting on Sport for People with Mental Health Problems was held in Tokyo. During the meeting, it was agreed that football should be promoted as a role model because all 8 nations had promoted football. World futsal championships for people with mental health problems have been held twice, in 2016 and 2018. Thus, this paper will talk about football mainly.

This study is a longitudinal study which has been carried out since 2009. In 2009, the head of this research group started this study in order to explore the situation of the sport promotion for people with mental health problems in other nations. Afterwards, in 2011 (during the friendship match between Italy and Japan in Rome), in 2013 (just before the 1st International Symposium / Meeting on Sport for People with Mental Health Problems) and then, in 2016 (at the 1st World Football Championship for people with mental health problems) this study was operated. In 2018, during Dream World Cup in Rome, this study was conducted with 9 participating nations to understand the world global current trends and issues of competitive sport for people with mental health problems. This study found key three points.

First, schizophrenia and depression has been the target illness in this field in 2013, 2016 and 2018. Second, participating nations tend to have serious financial difficulties and issues of governance. The top 5 in Dream World Cup 2018 ranked teams had at least head coaches.

Third, this study reported that players with mental health problems showed positive behaviour after the championship. Yet, it is difficult to attest to the effect of recovery by doing sport (football) due to thin evidence.

This study stressed that there is a need to keep having a longitudinal study for the further development of sport for people with mental health problems.

Key Words: Sport of People with Mental Health Problems, International Comparative Study, Self Help Group, Athletic Environment, Dream World Cup

* Toin University of Yokohama, 1664 Kurogane-Cho, Aoba-Ku, Yokohama City.

** Toin University of Yokohama, 1664 Kurogane-Cho, Aoba-Ku, Yokohama City.

*** Shinkemigawa Mental Clinic, 1-9-18-2A Hanazono, Hanamigawa-Ku, Chiba City

1. はじめに

精神障害者の競技スポーツは、1990年代以降、我が国も含め世界の国々で推進されてきたことが報告されている。デフリンピックが1920年代、パラリンピックが1950年代とすれば、精神障害者の競技スポーツの国際化は極めて新しいといえる。その中でも早い段階から推進したのは、精神保健の先進国とされるイタリアである。イタリアは、1978年に通称バザーリア法（「任意及び強制入院と治療」に関する法180号）により大型精神科病院を閉鎖し、精神障害者を地域で支援していく施策が打ち出した。一人の医師が、患者に何をしたいかを尋ねたところ「フットボールがしたい」と答えたことから、まずはボールを蹴る機会を提供し、やがてはクラブを結成、そして全国大会を開催してきた（田中、2012）。イタリアでは、精神障害者を主な対象とする全国大会と、あらゆるマイノリティが出場する「ソーシャルフットボール」の2つの大会が開催されている。

一方、我が国では、1999年に精神保健福祉連盟内にスポーツ推進委員会が設置されて以降、バレーボールが推進され、全国障害者スポーツ大会でも正式競技として採用された。

2006年にNewsweekにイタリアの活動を収録したドキュメンタリー映画『Crazy for Football』が掲載された。この記事をもとに、日本関係者が2009年にイタリアに出向き、『スポーツとして推進していこう』との合意の元、2011年、大阪のチームとローマのチームの親善試合が実現した。

精神障害者のスポーツが国際化を急速に進化させたのは、2013年に日本で開催された第1回精神障がい者スポーツ国際シンポジウム／国際会議であった。参加した国は、開催国である日本、イタリア、アルゼンチン、ペルー、イングランド、デンマーク、ドイツ、韓国の8カ国であった。国際会議では、精神障害者スポーツの国際化を論じる上で重要な2点が方向付けられた。第1に、各国で精神障害者に対するスポーツを推進している関係者が初めて顔合わせをしたという点である。これにより、顔が見えなかった関係者が初めて顔を合わせたことにより、国際化への議論を進めやすくなったことである。第2に、このイベント直前に実施された調査により、対象疾患と推進競技が示されたことである。まず対象疾患であるが、幅広い疾患を対象とする精神科領域の中で、F2（統合失調症）とF3（気分（感情）障害）を主な対象疾患とする方向性が示された。そして、参加した全8カ国でフットボール

が推進されていたことにより、精神障害者のスポーツの発展のツールとしてフットボールの国際大会を開催することが合意されたのである。同年、我が国における初の精神障害者のスポーツの国統括競技団体として「日本ソーシャルフットボール協会」が設立された。これは、精神疾患もそしてスタッフも含め、フットボールを通じた共生社会の構築を協会のビジョンとして掲げていることに由来する。イタリアは様々なマイノリティとしているが、我が国は主に精神障害者を中心としているところが大きく異なる。

そして、2016年、大阪のJグリーンで第1回ソーシャルフットボール国際大会（the 1st World Football Championship for People with Mental Health Problems）（以下、第1回大会）が開催され、日本で推進されていたフットサルが競技種目として導入された。しかしながら、見た目にはわかりにくい障害であること、各国が資金難であること、さらには競技スポーツとしての歴史が浅いことなどの理由により、第1回大会の参加国は日本、イタリア、ペルーの3カ国に留まった。ワイルドカードとして大阪選抜も参加したため、計4チームで試合を行った。優勝は日本、準優勝は大阪選抜と、日本が圧倒的な強さを見せた。また大会期間中に開催された会議にて、第2回大会の開催国がイタリアに決定した。

バザーリア法制定の40周年の2018年に、第2回大会がイタリアの首都ローマで開催された。この大会より、大会名が長いことを理由に通称名をDream World Cupにすることがメール会議で決定した。イタリアで開催された第2回大会では、イタリア、日本、ペルーを含む9カ国が参加した。これはイタリアが寄付金を集め、出場国に国内滞在費を全額免除したことが大きい（Muscellini, 2018, interview）。新規に参加した国は、2013年の国際会議に出席し第1回大会に不参加であったアルゼンチン、さらには初出場のフランス、スペイン、ウクライナ、ハンガリー、チリであった。

1996	イタリアで初の全国大会開催
1999	日本精神保健福祉連盟にてスポーツ推進委員会発足
2006	イタリアの活動がドキュメンタリー映画「Crazy for Football」がNewsweekで世界に発信。
2007	第1回Scanbio Cupが大阪で開催
2009	日本関係者がイタリアを訪問
2011	ローマと大阪の親善大会開催
2013	第1回精神障がい者スポーツ国際シンポジウム／国際会議の開催
	日本とイタリアで、それぞれ国統括競技団体設立
2016	第1回ソーシャルフットボール世界大会
2018	第2回ソーシャルフットボール世界大会（この大会よりDream World Cupに名称変更）

図表1：精神障害者の競技スポーツの主な国際動向

本研究は、研究代表者が2009年にイタリアを訪問したことを機に始まり、2013年、2016年と縦断的に世界動向を探ってきた。そこで、2018年に第2回大会の開催が決定したことにより、出場国の現状と課題を読み解くことで、精神障害者の競技スポーツの動向を明らかにすることとした。(田中)

2. 目的

精神障害者の競技スポーツの歴史は浅く、十分に体系化されていないことは、先行研究からも読み取れた。そこで、本研究は、第2回大会に出場した各国は、実際にどのような活動をし、どのような選手団を組み大会に向け準備をしてきたのか、そしてどのような課題を抱えているのか、フットボールは精神疾患のリハビリに有効であるのかなどを国際比較を用いて明らかにすることで、最新の精神障害者スポーツの国際動向を知り得ること、そして、精神障害者の競技スポーツの国際化に向け、国内外の発展に貢献の一助とすることを目的とした。(田中)

3. 方法

本研究は、2018年5月のDream World Cupの大会期間中と11月～2月の2回に分けて実施した。

5月の調査では、Dream World Cupに出場した9カ国(イタリア、ペルー、アルゼンチン、チリ、フランス、スペイン、ウクライナ、ハンガリー、日本)の団長、もしくはヘッドコーチを対象とし、アンケート調査法と半構造化インタビュー法を実施した。アンケート調査では、2016年に実施した第1回大会に設定した質問に加え、各国の競技環境、課題、精神障害者に対する社会の関心や態度などを記名式で質問した。また、第1回大会と第2回大会に出場したイタリア、ペルー、日本に加え、英語、もしくは通訳を介してインタビューが可能な国のアルゼンチン、フランス、スペインに対しても、アンケート調査をもとにインタビューを実施した。アンケートは開会式前に開催されたシンポジウムで配布し、即日回収した。インタビューは競技会場にて、試合時間の合間に実施したが、日本のみ帰国後に電話で調査を行った。

また、大会終了後の半年後を目途に、第1回大会から引き続き出場しているイタリア、ペルー、日本の3カ国に対し、選手の予後を記名式のアンケート調査を実施した。配布方法は、メールでの依頼、回答はメールでの返信であった。日本については、アンケートに加え、調査協力者に対しインタビューを実施した。そのインタビューにより、第1回大会の選手の状況を数

値化できることが明らかになったことから、これについても質問項目として追加した。(田中)

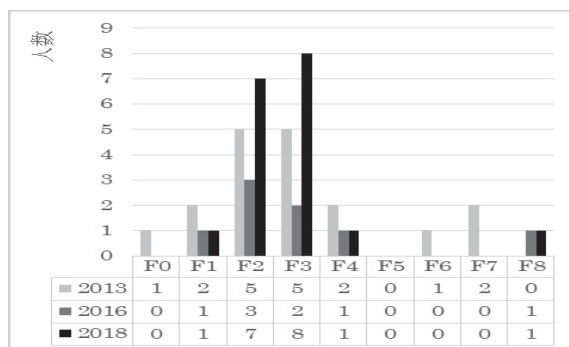
順位	国	アンケート回答者	役職
1	イタリア	Santo Rullo	イタリア精神障害者サッカー協会会長
2	チリ	Miguel Ruiz Pasten	精神科医
3	ペルー	Renato López	社会学者・チームメディカル
4	ハンガリー	Monika Mark	ソーシャルワーカー
5	日本	Takehiko Okamura Daisuke Maniwa	JSFA 前理事長(調査実施日は理事長) インタビューは真庭氏
6	アルゼンチン	Raimundo Muscellini	精神科医・チームマネージャー
7	スペイン	Patniva Zamora Crisol	チームスタッフ
8	フランス	Dominique Laurent	La Maison Bleue会長
9	ウクライナ	Jerzy Brozyna	NGO会長

図表2：調査協力者一覧

4. 結果及び考察

4.1. 選手の対象疾患

前述した通り、精神科領域で対象とする疾患は幅広く、WHOが示すICD-10「精神及び行動の障害」では大きく9に分類されている。2013年第1回精神障がい者スポーツ国際シンポジウム/国際会議、2016年第1回大会ともに、「F2」と「F3」が多かった。本調査でも同様の傾向を得られ、「F2」は9カ国中7カ国、「F3」は8カ国であった。このことから、世界的にもF2とF3を主に支援対象とする国が世界大会に出場しているといえる。図表3に、参加選手数の疾患をまとめた。但し、それぞれ母数が異なる。(田中)



図表3：参加選手の対象疾患の動向(田中ら, 2018)
〈2013 n=7; 2016 n=3; 2018 n=9〉

4.2. 各国選手団の動向

第2回大会に出場した9カ国に、選手団構成や第2回大会参加に向けた練習状況について質問した。

4.2.1. 出場チームのスタッフ構成

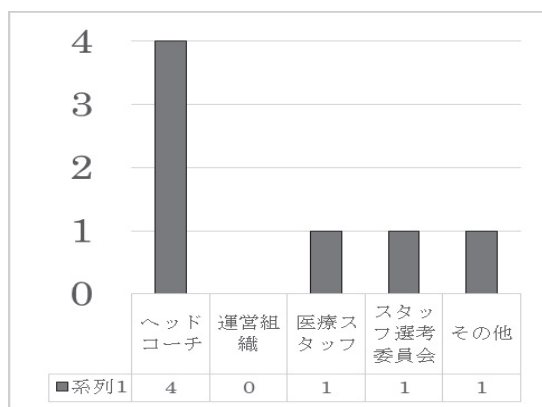
「出場チームのスタッフ構成」について聞いたところ、「ヘッドコーチが在籍」が6カ国、「アシスタントコーチ」が6カ国、「アスレチックトレーナー」が6カ国、「アドミニストレーションスタッフ」が3カ国であ

った。換言すれば、フットボール競技の国際大会にも関わらず、試合を指揮するヘッドコーチや選手のフィジカル面をケアするトレーナーが不在であるチームも大会に出場していたとの結果を得られた。

さらに、「ヘッドコーチの専門性」を尋ねたところ、最も多い回答は「プロコーチ」の4カ国であった。次いで「ライセンスはないが指導経験は豊富」が1カ国、「ライセンスはないが選手経験が豊富」が1カ国であった。「フットボール未経験者」は0であった。

4.2.2. 選手選考

代表チームを結成する上で、「セレクションを実施したか」を尋ねたところ、「実施した」のは6カ国、「実施しなかった」のは3カ国であった。また、「セレクションを実施した」6カ国のうち4カ国は、ヘッドコーチがセレクションの選手選考に携わっていた。



図表4：代表選手の選考者（森谷ら，2018）〈n=6〉

4.2.3. 事前強化合宿

「大会開催前過去1年以内の代表強化合宿の実施回数」について聞いたところ、最も多い回答が、合宿を「10回以上実施」したチームと「4～9回実施」したチームでそれぞれ3カ国であった。次いで、「2～3回実施」が1カ国で、「1回実施」が2カ国であった。大会1位のイタリアと2位のチリは「4～9回」、3位のペルーは「10回以上」であり、3位以上の国が合宿を4回以上は最低実施していたことがわかった。本大会5位となった日本は「2～3回」であった。

4.2.4. 代表合宿以外の日々の練習状況

代表選手が代表合宿以外で「日常的にどの程度練習をしているか」を尋ねたところ、最も多い回答が「週に1回」で6カ国、次いで「3～4日に1回」が3カ国となり、この2つに回答が集中した。

4.2.5. 選手団における動向

図表5は、参加9カ国の内、上位5カ国の成績を示している。成績、スタッフ構成、コーチの有無、合宿開催数、代表以外の練習日数、セレクションの開催の有無を交えた国際比較である。コーチが配置され、合宿回数が多い国が上位にいることから、体系的に代表チームが構成されているチームが上位にいることが読み取れる。これを裏付けるコメントとして、日本代表監督を務めた奥田（2018，インタビュー）は、以下のように指摘した。

「海外の能力の高い選手に対し対抗するには、チームとして合宿のセッションを増やすのももちろん、普段の代表以外での活動でフットサルという競技を理解して取り組まないといけな。その1つとして、フットサルを理解している専門の指導者のもとで指導を受ける。現状ではそこに取り組んでいるチームは皆無であり、そこを変えない限り国内の競技レベル向上や世界と戦うことはできない。」

本調査の限り、日々の練習が「週に1回」と回答する国が上位5チームでも全体の8割であることから、代表以外の練習回数は十分にあるとの結果には至らず、フットボールに関わる人材も含め、精神障害者がフットボールの競技力を向上しうる環境は十分とはいえないといえよう。（森谷）

順位	国	スタッフ構成	コーチ	合宿	代表以外での練習日数	セレクション
1位	イタリア	HC, TM, AC, AT	プロコーチ	4～9回	週に1回	あり
2位	チリ	HC, AC	プロコーチ	4～9回	3,4日に1回	あり
3位	ペルー	HC, AC	選手経験豊富なコーチ	10回以上	週に1回	なし
4位	ハンガリー	TM	コーチなし	1回	週に1回	なし
5位	日本	HC, TM, AC, AT, AS	プロコーチ	2,3回	週に1回	あり

図表5：第2回大会上位5カ国の国際比較

HC：ヘッドコーチ

AT：アスレチックトレーナー

TM：チームマネージャー

AS：アドミニストレーションスタッフ

AC：アシスタントコーチ

4.3. 参加国の現状と課題

第2回大会期間中にインタビューした国は、7カ国であった。インタビュー対象国を、①2013年国際会議参加、2016年第1回大会の参加国（イタリア、ペルー、日本）、②2013年国際会議には参加したが2016年第1回

大会不参加(アルゼンチン)、③第2回大会が初出場(フランス、スペイン)の3つに類型化し、それぞれ、①の国には、出場を決めた経緯と前回大会後の国内の影響、②出場を決めた経緯、③出場を決めた経緯と大会を知った経緯を尋ねた。

4.3.1. 2013年国際会議に出席、2016年第1回大会参加国の現状と課題(イタリア、ペルー、日本)

開催国であるイタリア(Rullo, 2018)は、第1回大会以後のイタリアの様子を以下のように示した。

「母国開催であることは大きい。・・・(略)・・・2011年に日本が来て、国際会議に招待されて、2016年の第1回大会に出場してきた。でも、これまでの歴史で一番大きな影響は、やはり『Crazy For Football』のドキュメンタリー映画だと思う。テレビでもたくさんとりあげられていて、学校で映画が流されたりして、認知度は確実に上がってきている・・・(略)・・・それでも、私たちの組織は、スポンサーがゼロで、寄付金で賄われているのが現状。」

ペルー(Lopes, 2018)は、イタリア同様に資金難であることを指摘した。

「第1回大会後に、ラジオなどに出演し、国内における大きなムーブメントとなった。選手のために、出場を決めたが、家族が中心となって組織運営や海外遠征が手配されており、国内全体の動きには十分に至っていない。」

日本(真庭, 2018)も資金難を示した上で、組織の課題を指摘した。

「第1回大会を開催できたことにより、選手の意識を高めることができた。それは間違いない。だが大会後も、そして今大会出場後も、資金獲得も含めた運営全般において組織としては何も成長できていない。・・・(略)・・・スタッフ側も変わらないといけない。それが課題である。」

いずれの国も資金が潤沢ではないことが共通の課題と示唆されたことに加え、組織体制の脆弱性も伺えた。

4.3.2. 2013年国際会議に出席、2016年第1回大会不参加国、第2回大会参加の現状と課題(アルゼンチン)

Muscellini (2018) は資金問題、さらにはキーマターが1人であり国内での推進の難しさを示した。

「第1回大会に出場には、資金という大き過ぎる課題があり、正直私自身が、その課題を克服することができずに途中で挫折してしまった。今回は、イタリアが資金援助をしてくれたため、何とか出場できた。次は、ペルーだから渡航費がそれほどかからないので出場できると思う。でも、その次がカタールでの開催なら、アルゼンチン国内の経済状況を踏まえると、(資金面の課題から)間違いなく出場は難しい。やりたい、選手のためにとは思っても資金が厳しい。それを考えると、世界大会開催が難しいと思うから、各地域(例えば南米など)で大会を開催すればいいのではないかなと思う。」

アルゼンチンは国の経済状況も影響し、経済難により大陸別開催なども提案された。仮にこうした地域大会が推進された場合、日本は未だ世界大会への参加がないアジア圏の発展に取り組む必要が出てくる。

4.3.3. 第2回大会初出場国(フランス、スペイン)

初出場国に対しては、主に出場に至った経緯について質問した。スペイン(Crisol and Villanueva, 2018)は、わずか2カ月で大会出場を決めていた。

「出場を決めたのは、2カ月前だった。イタリアに声をかけてもらい、この大会を知った。知ってから、カタルーニャ地方の精神障害者支援の17団体が患者さんと話し合い、出場するか否かを決めた。出場を決めた8団体で今回のチームは結成されている。・・・(略)・・・スペイン全土となるには、国内の問題もあるので、現状では難しい。・・・(略)・・・今回参加して、良かったと思う。次回も参加できればとは思いますが、まだ何もわからない。まずは大会が終わって皆に報告してから」

スペインの国内問題とは、まさにカタルーニャ独立運動に関することである。そのため、スペイン全土から選出された選手団ではない。特徴的なことは、まずは患者本人に意思を確認し、出場を決め、今後の活動も選手の意思を尊重していくことであろう。

一方、フランス(Laurent, 2018, interview)は、スタッフも選手も皆、何らかの精神疾患を有している

セルフヘルプグループであることを伝えた。

「以前、イタリアの南部で開催された大会に出場したことで、声をかけてもらった。その時のチームも今回のチームもフランスのLanguedoc-Roussillon に拠点を置くセルフヘルプグループである。フランスの精神障害者に対する活動支援制度は、資金の仕組みもしっかりしているため、これまでも私たちのグループは、海外遠征を行ったり、国内外で積極的に文化活動も行っている。セルフヘルプグループだからスタッフ（代表もコーチ）も精神疾患当事者である。」

セルフヘルプグループとは、「自助グループ」と訳されることもあるが、たとえばサミュエル・スマイルズの著書「Self-Help」の訳者である金子や藤永（2018:pp. 2-5）は、「単純に他人や専門家、行政に頼らず、自発的にかつ自力で（状況によっては当事者で励まし合って）問題を解決し、自立した生活をする力」、いわば「努力」だけではなく、「人徳の大切さなども重視する人との関わり合の重要性」についても著者の思いを示している。いずれにせよ、フランスにおいても精神障害者自身が自らの手で誇りをもって活動することに重きを置いていたが、本稿ではこうしたフランスの活動が選手団の新たな類型として今後精神障害者の競技スポーツの新たな活動形態となりうることを指摘したい。なぜならフランスを除いた8カ国の選手団スタッフは、一部のフットボール関係者を除き、医療福祉関係者が選手を支援していたからである。

4.4. 大会半年後の経過

精神障害者の競技スポーツ推進において、選手が精神疾患からリカバリーすることも重要な視点にある。第1回大会、第2回大会ともに出場したイタリア、ペルー、日本を調査対象とした。

「精神疾患のある選手にとってフットボールはどのような影響をもたらすか」との問いに、3カ国ともに回答があったのは「就職、通学、結婚などの社会参加の促進」であった。「自己効力感」を選択したのは、イタリアと日本の2カ国であった。

「第2回大会開催後、選手の病状はどうだったか」については、イタリアとペルーは「病状は回復し、良い状態を保っている」と回答したのに対し、日本は「一度悪化し、リカバリーしている」と回答した。また「フットボールは病状の改善に役立つか」については、3カ国ともに「選手の家族の支援」であると回答した。

4.5. 親善大会、第1回大会と第2回大会の選手の変化

真庭（2018, interview）は、2011年にイタリアで開催された親善大会、2016年の第1回大会、2018年の第2回大会と選手団スタッフとして選手を身近に見てきた。そうした経験から、第1回大会と第2回大会の大きな違いとして、「選手が第2回大会期間中に、『次はペルーで第3回大会が開催される』とイタリアがアナウンスしたことで目標を持って前向きになれた」と指摘している。加えて、大会前に選手選考から漏れた選手がいたことにより「自分たちが代表という看板を持ち続けられた」という。そのため「普及は大事であるが、その先に何もないのであれば別のやり方を考えた方がいい」と指摘し、代表活動は日本ソーシャルフットボール協会の活動のシンボルとした。

図表6は、大会後の変化である。大会参加後も選手が通院している傾向は変わらなかったが、就職状況には変化が見られた。2016年の第1回大会後には「デイケア・作業所」が8人と多かったのに対し、2018年は「就職」が7人である。この数値だけでは、フットボールが病状からのリカバリーと就職に有効であると断言することは難しいが、傾向は読み取ることができ、今後も縦断的な調査が必要であるといえる。（田中）

		就職	学生	デイケア・作業所	なし	通院	不明	n
2011	遠征前	1	1	4	1	7		7
	遠征後	4	0	1	1	7	1	7
2016	大会前	2	0	10	0	12		12
	大会後	3	0	8	0	12	1	12
2018	大会前	6	2	3	1	12	0	12
	大会後	7	2	2	1	12	0	12

図表6：親善大会、第1回・第2回大会の選手の変化

5. まとめ

精神障害者の競技スポーツの歴史は、遡って約20年にも満たない。それだけに競技スポーツの推進意義や病状のリカバリーに有効であるとのエビデンスを示すには至っていない。加えて、参加国の資金難により状況も不安定である。しかしながら、本調査が示す通り、精神障害者が大会参加後にリカバリーにつながる兆候が認められており、精神障害者の競技スポーツの推進には実践とそれを批判的に評価する継続的な研究は、今後も必要であることは間違いない。（田中）

【参考文献】

サミュエル・スマイルズ（2018）セルフ・ヘルプ自主独立の精神、PHP 研究所。ほか
この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。